日本初の女教師　黒沢止幾（くろさわ　とき）

文化３年（1806）　～　明治 23 年（1890）　　**那珂市歴史民俗資料館**

文化３年（1806）錫高野（すずこうや）（城里町）の修験者であり寺子屋も営む黒沢将吉の家に誕生、１９歳で父の実家久慈郡小島（常陸太田市）の農家鴨志田彦蔵の元に嫁いだ。しかし、２６歳の時に夫が病死したため翌年二人の娘を連れて実家に戻った。それからの２０年、娘たちの養育は母親に頼み、各地へ小間物などの行商に励んだ。そのかたわら俳諧や漢詩・和歌などを学んだ。特に和歌は、止幾の日本人としての心を開花させることになった。４６歳の時、湯治を兼ねて行商に出向いた草津温泉、菊屋に逗留し請われて子供たちに素読（そどく）を教えた。正式な門人を採った最初であった。

翌年、行商を止めて隣村の塩子（城里町）に仮住まいして近隣の子供たちを教えていたが、その後実家の錫高野に戻り、安政４年（1857）２月から私塾を開いて本格的に師匠となった。翌安政５年から６年にかけては、水戸藩主前徳川斉昭が幕府から処罰を受けたことや夜空に白色彗星が出現したこと、志士たちの激しい攘夷運動の横行など、世間には不穏な空気が漂いやがて安政の大獄がおこった。止幾は、このような難局に対処しようと決意し立ち上がったのである。それまでに自らが重ねた学問と和歌読みから培われた尊王憂国の精神、藩主烈公斉昭に対する強い景仰の心と幕府の圧政に対する憤激からであろうか。５４歳の止幾、烈公の冤罪（えんざい）を解き、政治の安定を期して、７３歳の老母を残して上京、安政６年２月２２日の朝である。

笠間－小山－佐野－桐生－中之条－沢渡－草津－善光寺－戸隠山－塩尻－伊那街道－妻子橋場－関ヶ原－石山寺－山科のコース。上州・信濃路・美濃路を経て安政６年（1859）３月２５日に京都に入った。およそ１カ月、さまざまな警戒をしながらの旅であった。

烏丸の扇屋に投宿し、「恐れながら天子に献じ奉る長歌」と題して自分の決意を認め、２８日紀維貞（きこれさだ）を通して孝明天皇への長歌の献上を依頼した。２９日には京都を離れて大坂へ下ったが、入京以来水戸から来た怪しい女として幕府役人に見張られていたこともあって４月１日には捕縛されてしまった。その後は大坂・京都から江戸へと護送され、厳しい訊問を受けた。斉昭夫人の密使ではないか、斉昭と朝廷・公家間の陰謀があるのではないかなどの嫌疑であった。

止幾はそれらの全てを否定したが、１０月１７日、中追放（山城・江戸・常陸への立入禁止）に処せられた。止幾は、この頃の心境を「君がため尽くす心の一筋に家をも身をも思はざりけり」と詠んでいる。

これ以降、止幾は郷里に近い茂木（栃木県）に一時仮寓したが、まもなくひそかに錫高野に帰り住み明治を迎えた。明治５年（1872）学制が発布されて小学校が誕生、６７歳で正式な小学校教師となった。日本女性教師第１号の誕生である。

明治２３年（1890）５月８日、国難に向きあい波乱に満ちた８５歳の生涯、生家（右写真）近くの墓所に眠っている。